

「陰陽五行と氣」を活用する

渡部 迪男 渡部内科医院 院長(神奈川県)

はじめに

医学は、その自然観に基づく人体観を前提として創造される。漢方医学が発祥した古代中国の自然観は、『太極から「陰陽五行と氣」が表れ、すべての存在を産み出す』(太極理論)という原理である。太極とはすべての母体でありはじまりである。宇宙もその中に存在する万物もこの原理に従う。これを象徴するのが太極図である(図1)。

漢方医学上人体は「陰陽五行と氣」によって成立する。現代とは異なるこの人体観に沿ってその医学理論の基本を学べば、漢方製剤をより効果的かつ比較的容易に活用することが可能になる。まず、氣とは物質のはじまりであるため、現代的な認識と同様に、人体とは生物としての動的な物質構造物である。この観点から機能・構造・エネルギーの三大要素を不可欠とする。古代的な認識として、「陰陽五行と氣」という原理・氣・経絡・命(「先天の氣」)をア・プリオリとして受け止めることから始まる。

漢方医学理論の基本を略説し、その応用として、特に体質改善を基本におく漢方製剤の処方例を以下に呈示する。

「陰陽五行と氣」とは何を指すか

太極理論に従えば、太極から氣が表われて宇宙を生じ、氣は動く「陽の氣」と固まる「陰の氣」に分かれる。それぞれが次の陰陽に分かれつつ、混合し、五行を生じ、次々に分化して、宇宙とそのすべてを産み出す。人体も例外ではな

い。人体自身が一つの太極の表われであり、そのすべては氣によって形成される。その仕組み上の骨格が陰陽五行である。このことは現代医学が解明した、解剖学上、生理学上などの各種の事実の中に「陰陽五行と氣」に相当する実態が存在することを示唆する。

たとえば、五行はその実態が肝心脾肺腎であることが明らかである。ところが人体の仕組み上、五行に先立ち、その根幹をなす陰陽が明示されているとはいいいがたい。陰陽は人体を二分する概念であり、その均衡を図ることが治療指針であるため、医学理論上具体的な指定が存在しなければならない。『黄帝内経素問』には、「人身の陰陽をいう時は、則ち背を陽と為し、腹を陰と為す」と明記されている。また漢方医学上人体にエネルギー源として作用する氣は、「後天の氣」と「先天の氣」の2種類である。

以上を前提として太極図をみると、いくつかの考察が可能である。まず、人体は腹部を中心とする前面と背部を中心とする後面の陰陽に大別される。したがって漢方医学的に人体の前後のそれぞれが機能上、構造上特徴的な役割を分担しあい、人体を二分しあう。腹部前面は元々の「陰の氣」のさらに陰であり、人体のもっとも現実的な役割である活動を担う(図2)。

陰である人体の前面で摂取された飲食物から、腹腔前

図1 太極図

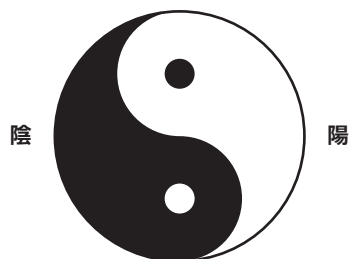
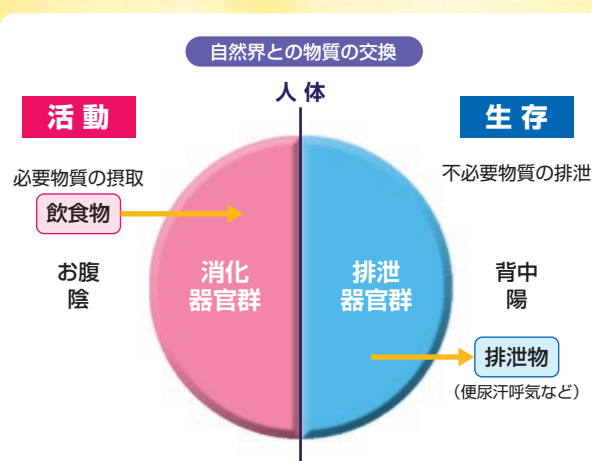


図2 陰陽



渡部 迪男: 古代漢方医学入門—人体の自然な仕組み、たにぐち書店、2013 より改変

面に存在する肝を含む消化器官系(「広義の脾」)を通して気(エネルギー)が発生する。誕生後の飲食に由来するため、「水穀の気」または「後天の気」とよばれる。「後天の気」によって活動に従事する。活動は人体の前面で行い、前面には活動に直接関わる腹部、胸部、目鼻などの五官や頭部、上肢が存在する。

これに対して背部(後面)は陽である。人体は元々「陰の気」の塊であり、固定的な存在であるが、生来活動や現象を生じ、元々の「陽の気」の先天的な性質を有する。したがって背部(後面)に関わる気とは、「陽の気」に由来する「先天の気」であり、いわゆる命である。「先天の気」は活動する姿の背後にあって、活動を支え、その根底となる生存に関与して、先天的統御的な役割を果たす。背部(後面)には腎泌尿生殖器官系、大腸、肺などの排泄器官、脳脊髄神経系、全身を支える脊柱、足腰などが存在する(肺は前後に関わる)。これらの中心である腎を含めて「広義の腎」とする。これに関わるエネルギーが「先天の気」である。主として「後天の気」が前面を流れ、「先天の気」が後面を流れる。人体の陰陽五行の陰陽とは、以上のような実態を有する概念である(図3)。

この陰陽(「広義の脾腎」)から五行を生じ、両者を心が結び、活動と生存という人体の働きのすべてを発揮する。人体の構造を作動して、その全機能を発現するエネルギーが「後天の気」および「先天の気」である。両者は合流して経絡を流れるだけではなく、血液循環に入り、その末梢の体液にも混入して、全身の組織臓器を灌流する。これを気血水と称する。陰陽は五行が具現化し、五行を気血水が連携しあい、整える(図4)。気血水は内部環境を

整え、体質を支持する。したがって気血水を整えることが、全身の内部環境、ひいては全身を整え、陰陽のバランスを確保する。

気の流量は絶えず変動するため、気血水に生じる異常には、それぞれ全身ならびに局所における流量の低下(脾虚、腎虚、血虚、津虚)、流れにおける減少、途絶(気虚、血虚、津虚)、鬱滞(気滞、瘀血)、これに伴う血熱などがある。これらを除き、気血水を賦活化すれば、陰陽五行が正しい体質が改善される。人体の根源は陰陽の内の陽、すなわち命、すなわち腎にあり、すべての病態の基本は腎虚である。まず先天の気を強化し(補腎)、後天の気を整え(補脾)、気の流れを中心に改善し(解表、行気)、血水を整え(活血化瘀、利水)、寒熱を整え、特に冷えを改善(散寒)することが治療の眼目である。気血水を中心に整えるため、基本的な方剤を活用することがポイントである。

処方例

①【基本処方：八味地黄丸＋十全大補湯】

八味地黄丸の地黄、山茱萸、山薬は補腎。山薬、茯苓は補脾。桂皮、附子は散寒行気。牡丹皮は除血熱、活血化瘀。沢瀉、茯苓は利水。十全大補湯の地黄は補腎、養血。黄耆、甘草、白朮、茯苓、人參で補脾。桂皮は解表、散寒。当歸、芍薬、川芎は血を調整。白朮、茯苓は利水。この2製剤で腎、脾、気血水の全体をカバーし、温性。年齢を問わず、虚証傾向、易疲労感、倦怠感等、広汎に対応が可能である。冷えが明らかであれば、附子が1日量1.0gを使用する。両者とも1日量を合方する。

図3 陰陽五行

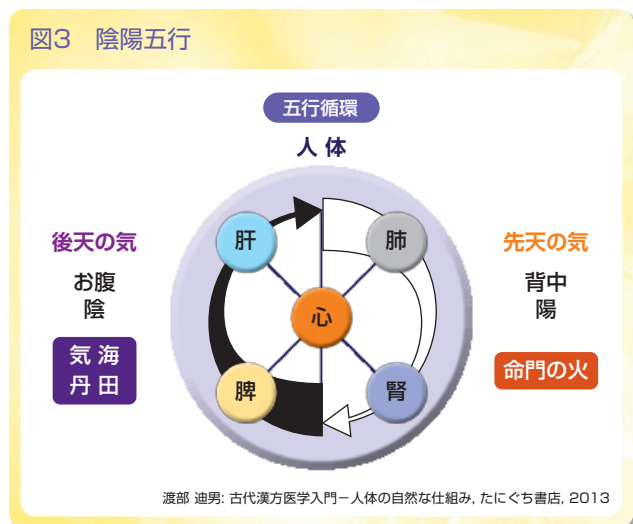
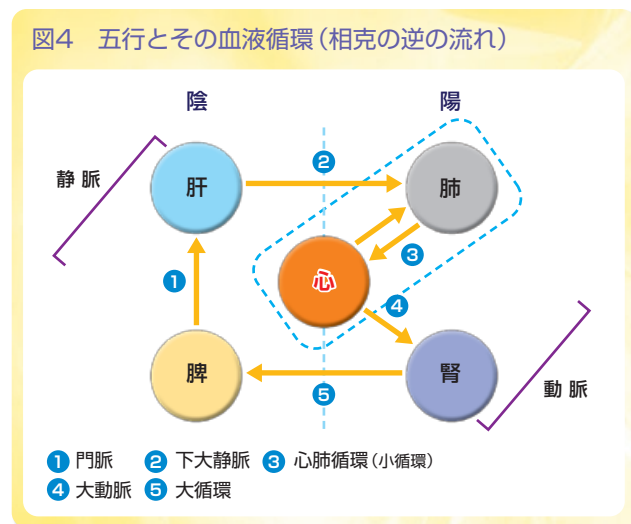


図4 五行とその血液循環(相克の逆の流れ)



②【基本処方】＋芎帰調血飲

強い冷えや低体温を伴う虚証に有効。月経前症候群、浮腫、過敏性腸症候群など応用が可能である。芎帰調血飲の地黄は腎。白朮、茯苓、大棗、生姜、甘草は脾。陳皮、香附子、生姜、烏薬は気。当帰、川芎、牡丹皮、益母草は血。白朮、茯苓は水。温性生薬を多用し、強い散寒作用を示す。各1日量の3分の2を合方し、分3または分2とする。

③ 八味地黄丸＋附子理中湯＋芎帰調血飲

前記処方の十全大補湯を附子理中湯に変方。極度の冷え、胃腸症状等を伴う虚証例。黄耆を除くが、人參、白朮、甘草を残して補脾(八味地黄丸の茯苓、山薬も補脾)。乾姜と附子により裏を強く散寒。乾姜は脾にも効果を示す。気血水は芎帰調血飲でカバーする。

④【基本処方】＋神秘湯

体力不足に呼吸器症状を伴う例。神秘湯の陳皮、蘇葉、柴胡、麻黄、厚朴で解表、行気。杏仁で止咳平喘。神秘湯を五虎湯、柴朴湯、小青竜湯、麦門冬湯、半夏厚朴湯などに変更が可能である。

⑤【基本処方】＋抑肝散加陳皮半夏

体力不足や過労でイライラ、不眠などを伴う例。抑肝散加陳皮半夏の白朮、茯苓、陳皮は脾。柴胡、甘草は気。川芎、当帰は血。半夏は安眠、釣藤鈎は平熄。抑肝散加陳皮半夏を柴胡加竜骨牡蛎湯、加味逍遙散、加味帰脾湯、三黄瀉心湯等に変更が可能である。

⑥【基本処方】＋薏苡仁湯

体力不足に関節痛、筋肉痛を伴う例。薏苡仁湯は気血水だけに配慮され、通利関節の薏苡仁がポイントである。背後の脾腎双虚を補う。薏苡仁湯を麻杏薏甘湯、防己黄耆湯、桂枝加苓朮附湯、桂芍知母湯、疎経活血湯等に変更が可能である。

⑦【基本処方】＋柴苓湯

柴苓湯は小柴胡湯と五苓散の合方で気と水を整える。水様性下痢や浮腫は背後に虚証、冷えが存在する。

⑧ 六味丸＋十全大補湯＋十味敗毒湯

八味地黄丸から桂皮、附子を除いた六味丸に変方。炎症性皮膚疾患に対応する。明白な虚証であれば、体質改善を目

表1 漢方薬の分類例

気分剤		
先天の気 (陽側・後面)	八味地黄丸・牛車腎気丸・六味丸	
後天の気 (陰側・前面)	流れを改善する	小柴胡湯・葛根湯・半夏厚朴湯
	発生量を増大する	人參湯・六君子湯・啓脾湯・呉茱萸湯
	発生量を抑制する	黄連解毒湯・荊芥連翹湯・竜胆瀉肝湯
血分剤		
養血剤	四物湯	
活血化瘀剤	桂枝茯苓丸・桃核承気湯・芎帰調血飲	
水分剤		
五苓散・猪苓湯		

渡部 迪男: 古代漢方医学入門－人体の自然な仕組み、たにぐち書店、2013 より改変

表2 代表的な生薬

補腎薬	地黄(養血薬)・山薬(補脾薬)、何首烏(養血薬)・杜仲(助陽薬)・山茱萸(収渋薬)・五味子(収渋薬)・蓮肉(収渋薬)・牛膝(活血化瘀薬)など
補脾薬	人參・黄耆・白朮・甘草・大棗・山薬など その他に、茯苓(利水薬)・薏苡仁(利水薬)・蒼朮(祛風湿薬)など
解表薬	麻黄・桂枝・生姜・紫蘇・辛夷・細辛・荊芥・防風・羌活・白芷・葱白など(以上は辛温解表薬)、柴胡・葛根・薄荷・牛蒡子・升麻など(以上は辛凉解表薬)
行気薬	厚朴・檳榔子・木香・烏薬・香附子・陳皮・枳実など
駆瘀血薬	当帰(養血薬)・川芎・桃仁・牡丹皮(清熱涼血薬)・大黄(瀉下薬)など その他に、延胡索・益母草・牛膝(活血化瘀薬)・木通(利水薬)・紅花・莢藜子(平肝熄風薬)・蘇木など
散寒薬	附子・桂皮・乾姜・呉茱萸・良姜・茴香など
清熱薬	黄芩・黄連・黄柏・竜胆草など(以上は清熱燥湿薬)、石膏・知母・山梔子・栝楼根など(以上は清熱瀉火薬)、生地黄・牡丹皮・赤芍など(以上は清熱涼血薬)

渡部 迪男: 古代漢方医学入門－人体の自然な仕組み、たにぐち書店、2013 より改変

指す。十味敗毒湯を消風散、当帰飲子等に変更可能である。

⑨ 一般的な注意

いずれも構成する生薬とその配合量、副作用に留意する。経過中は症状が変動するため、主症状だけではなく、その他の症状にも着目する。睡眠、冷え等に配慮する。基本処方の八味地黄丸は六味丸の他、牛車腎気丸、ときには啓脾湯等を適宜選ぶ。散寒薬と清熱薬は要注意である。

【参考文献】 渡部 迪男: 古代漢方医学入門－人体の自然な仕組み、たにぐち書店、2013